

バルボライ

1969.7.11 0号

明大サークル連合監事委員会
情宣局 林内紙 発行

(フリス)

いかまつに弁解しようとも、このようないい大学に生息してきた、いやとうぜざるを得ない我々自身への我々自身による叛乱でもあるのだ。そしてこのようないいの質をもつものであるが故に、それは承認せざるを得ないし、前述の告発の質を担う問題提携あるいはその向ひづれ自体の内的構造をも変革し

アア、二の「沉默」二の「静寂」、一体何がいへと云うのだ？！
全明治の聞いの同志諸君おまじサーカル員同志諸君！

梅雨の最中に始まつた我々の聞いの現状をあざ笑ふのみのうちに、バリケードに冷たい雨が降りそ、毎日夜寒いのだ、おやみやだつて寒いのだ。今

年四梅雨は、いたないそれは、やけに長い。我々の聞いの現在的なあり様

おまび情況總体の困難を著微するのみのうちに、陰湿な梅雨の疊り空が一切を包み込んを以て。一切がアスベスにのめり込んをしまつてゐる。退廃の力には、ジワジワと我々聞い主体の内部に蓄積黒雲累積ははじめている。油断は禁物だ。退廃の力は、自身を犯されぬうちに、それを感受しなければならない。その根因を明確に論理化しなければならない。大学当局の思想的無内容性に対する告発と同時に、今こそ我々の聞いの論理の検証おまびその次落自体をも落ジタルに（根源的に）向いつめていかなければならぬ。

ところで 同志諸君！ 今、一体何が問題なのだ？

過去一貫した明大当局の「冗舌」と表裏した「沉默」の隠隠且つ狡猾は、我々の聞いへの対応そのもの最先ず問題にしなければならない。その対応は見方をなれば、良心的で、リベラルなふるまいに見えるという意味に於いて、二重に犯罪的なのだ。それは、時間的経緯といつ無為を悲つところの、実は、我々の聞いの扼殺、然後をもくろむ極めていたらない、小国ため込み高利貸しのよくな、闘争破壊の策動なのだ。云い換えれば、それはこの用いを担う主体の内部の退廃的な氣分あるいは学生間の内部的対立の現在的に消極的なエネルギーを、時間的経緯という触媒を有効に当局の側に引き込むことによつて、それらを醸成し、具現化することを意図しているのだ。

聞いの対象への、同時に我々に対する权力の攻撃は、この用いを担う主体の内面からも、聞いの経過程の論理的検証をはづく！

前期試験が本題であることをひたえ、聞いの経過程の論理的検証をはづく！

身体的へのなしくずし的のめり込みをへせぎ、聞いの論理を再度明確に構築せよ！

明大南北川全共闘運動の実体的構造の空洞化を終元檢し、それをして自身の問題として受けとめ、その意味の理論的深化をはづく！

大學の対象への、同時に我々に対する权力の攻撃は、この用いを担う主体の内面からも、聞いの経過程の論理的検証をはづく！

学園的鬱考自体おまびその存在其體の検証をあ図するものだし、そのような

あるバリケードを媒介とした我々の聞いの基本的方向は、總体としての

検証性の欠落、も現行大學の実体を構成する既成室内への告発でもある。また同時に

へ裏面に「つく」